

# 流れていく先



「行けっ。ぬかせ。」

「負けるな。がんばれ。」

ぼくの住む埼玉さいたまけん県は、海はないけれど、たくさんの川があり、「川の国 埼玉」などといわれている。ぼくの通う学校の近くにも小さな川が流れている。今クラスで大流行している遊びは、放課後のボートレースだ。ボートと言っても自分たちは乗らない。葉っぱ一まいを小川に流して速さを競い合うのだ。きそぼくのボートはカナムグラの葉。公園のフェンスにまきついているのを見つけて手に入れた。ざらざらしたさわりごちと、モミジのような葉の形がきれいで気に入っている。

「ゴール！」

「ようすけ洋介さんが一位だ。」

今日のレースはぼくが勝った。レース後、ぼくたちは、自分の見つけた葉っぱについて語り合った。七月に入り、とても暑い日が続いているけれど、川のそばはずすくとしてとても気持ちがよかった。

その日の夜、いい気持ちでおふろから上がると、お兄ちゃんがしんこくそうな顔をしてテレビを観ていた。何だろうと思つてのぞいてみると、海鳥が栄養不足で命を落としているというニュースだった。

「鳥たちもえさをとるのが大変なんだね。」

と、ぼくが言うと、お兄ちゃんは首をふった。

「そうじゃないんだ。人間が川にすてたプラスチックのごみが、海まで流れて行って、それを海鳥がえさとまちがえて食べてしまっているんだ。もちろん、プラスチックに栄養なんかはないから、それが原因で死んでしまうということなんだよ。」

ぼくはびっくりした。ぼくたちの遊んでいる川はあんなにきれいなのに。川を流れるごみが、海鳥の命をうばうこともあるのだなんて。



「そんなにごみってあるの。」

「今、地球の海の中に人間が出したプラスチックごみが、一億おく五千万トン※もあるんだって。信じられないよな。それに、こまっているのは、さっきの海鳥だけじゃないよ。海にうかぶプラスチックのごみは、だんだん細かくくだけてしずんでいき、水の中に住む生き物が食べてしまっているらしい。」

「えっ、一億五千万トン……。海鳥いがい以外の生き物も……。」

なんだか心が苦しい気持ちになった。テレビには、ごみがうかぶ海の中を泳ぐウミガメのすがたがうつし出されている。

「学校の近くのあの川も、海につながっているんだよなあ。」  
テレビの画面をじっと見つめていたお兄ちゃんがつぶやいた。

「この海、なんとかしたいよな。」

その言葉が、ぼくの心にずしりとひびいた。

明日の放課後も、ぼくは、川に行こうと思う。みんなをさそって。



※一億五千万トン…一億五千万トンのプラスチックごみは、東京ドーム約三四五・六杯分。